



**【熟教師】
麻紀の個別指導**

基本CG18枚
セリフ差分106枚



「今日も塾か
行きたくなーな」

彼は大学合格を目指し塾に通っているが
将来の夢はないし漠然として
確固たる目標がない

肉体労働は向いてないので
大学行ってデスクワークの職に就ければ
自分の人生はそれで良いと考えていた

「こんにちはー」

「おさむ君
大変よ」

「何ですか？」

「山田先生が
交通事故に合ったのよ」

「えっマジですか!?!」

「骨を折って一月ほど入院するらしいの」

「重傷じゃないですか」

「それで申し訳ないのだけど
代わりの先生になっちゃうけど
いい?」

「ええ、別に構いませんけど」

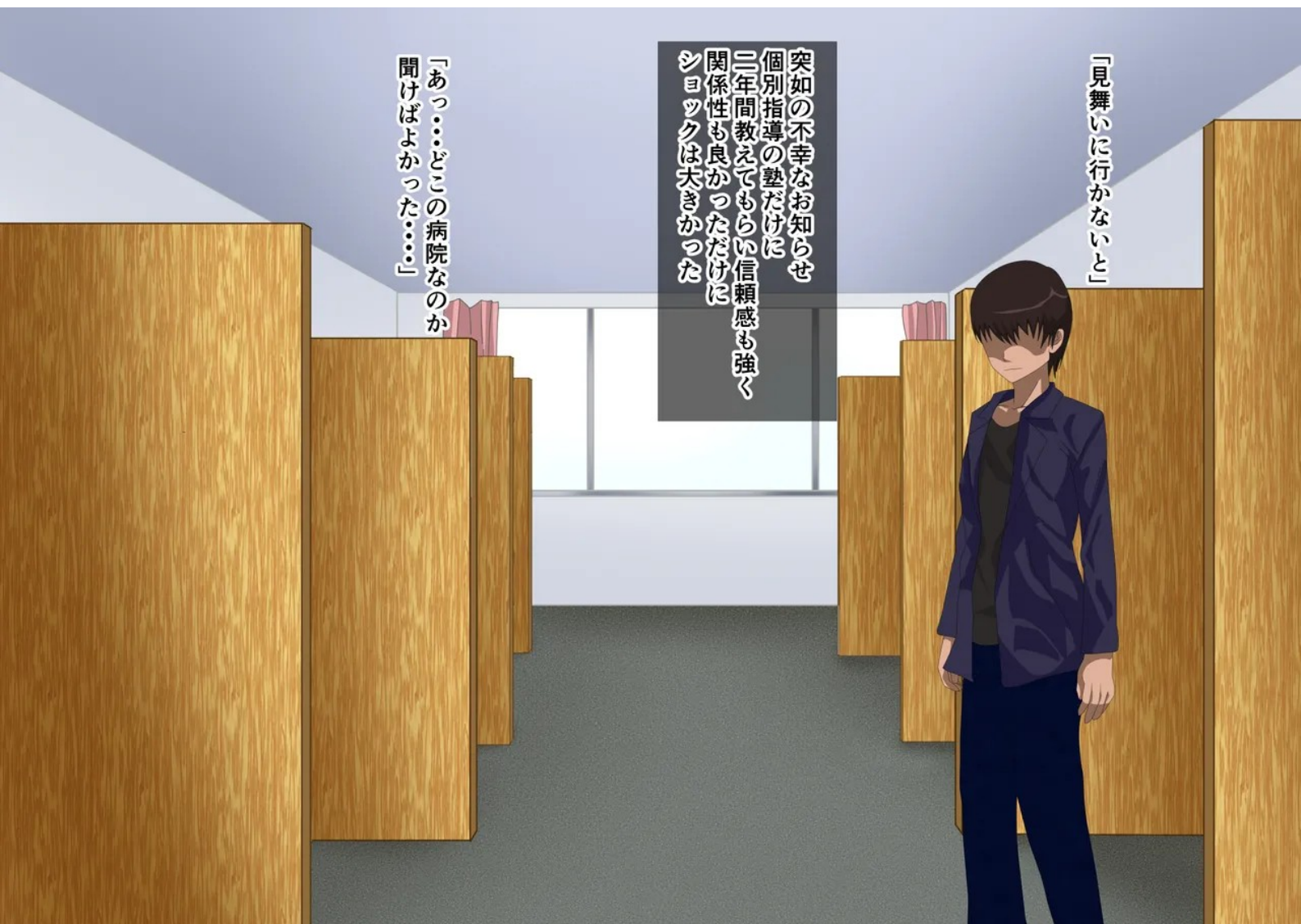
「良かった」



「見舞いに行かないと」

突如の不幸なお知らせ
個別指導の塾だけに
二年間教えてもらい信頼感も強く
関係性も良かっただけに
ショックは大きかった

「あっ……どこの病院なのか
聞けばよかった……」



「こんにちは君が
日下部おさむ君ね？」

「あ…」

言葉を掛けられ
いざかびっくりし返答できなかった
ただ、おさむは驚いたからだけではなく
本当の所はもっと別な
なにかだったようだ



「……」

それは
目の前に現れた美熟女に息を呑み
言葉がでないほどで
妖艶な容姿におさむは全身が痺れ
生まれて初めて女性に一目惚れしたからだ





「はっはっ！おさむです！」

「おさむ君...よね？」

勢いよく席を立て返事をしてしまい
周りの視線が注ぐ

「うあ…」

「うふっ元気が良いのね」

「はは…すみません」



「まず自己紹介からね
今日から担当させて貰います
神田 麻妃と言います
よろしく願います」

「ようよろしく願います!」

「ふふふ
本当に元気ね」



この塾では
学校の教科書を持っていき
どれぐらい進んでいるのか確かめ
成績も教えないといけない
今の自分に合ったテキストを渡され
わからない所は聞き一緒に問題を解く
ごく普通の個別授業なのだ

男子校なため異性との接触も少なく
耐性がないおさむは初恋と緊張で
手が震えてしまい上手く字が書けな

「おさむくん緊張してさるの〜」



「あーささ〜」

「同性同士の方が勉強しやすいよね
今日だけ我慢してね」

「ごっ誤解です嫌とかじゃなくてその
男子校なので女性と関わる事が少なくて
だからその……意識しちゃって」

「そんな私みたいなおばさんを
意識だなんて」

「年は関係なくて凄く綺麗だから」

「まあ……
お世辞がうまいのね」

「すみません変なこと言っ
てキリスト解きますね」



十代少年の突拍子もない
口説き文句に四十にもなる麻紀は
大人げもなくキュンと胸がときめいてしまった

(私ったら息子よりも年下の子に
意識しちゃうなんてみっともないわ)

お互い意識してしまっ
ぎこちない雰囲気の中
テキストを書き終えるおさむ

「お疲れ様

おさむ君は覚えが早くて優秀ね
先生のお仕事が楽になってしまっわね」

「先生の教え方が上手いからです
だから俺の担当で居て欲しいです」

「おさむ君……」

「それじゃお疲れ様です」



(もしかして私の事を…
まさかね、おさむ君の母親より
年上のおばさんを好きになるなんて
ありえないわ)



おさむは母より年上の女性で
恋を抱けてしまう

担当教師の事故がなければ
麻紀とも出会うことは無かった事に
おさむは強い運命を感じてしまう

「はあ……麻紀先生と
もっと一緒に居たいな」

恋したおさむは
良い成績を得るため勉学に積極的になる
それはやはり麻紀に認められたいからだ



「おさむ君の志望大学はどこにするの？」

「偏差値が平均程度の大学を目指そうと」

「おさむ君ならもっと上を目指せるのにもったいならわよ」

「本当ですか？」

「自信もっていいのよ」

「なら次の定期試験いい点とったらお願いしても良いですか？」

「お願い？お金とかダメよ」

「お金じゃないんです。先生の……」

「私のなに？」



「先生の胸を触らしてください」

「ええっっ!!」

おさむのお願いに麻紀は
初めてあつた時から女として
意識されていた事に気付かされた

大人ならセクハラとして
叱らなければいけない場面だ

けれど複雑な感情が入り乱れる
若い子に恋を抱かれること
性的な目で見られるのは久しぶりで
不埒にも嬉しくなってしまうのだ



「私みたいな年増の胸触っても感動は得られないわよ」

「そんなことないですよ、若いとか年増とか関係ないんです
俺は先生の胸が触りたいんです」

「異性に耐性ない俺を男にしてくれませんか」

(なんて真剣な眼差し
こんな目をされたら断れないじゃない)

「おませさんね…わかったわ
全科目90とれば触らしてあげる」

「えっ90以上…わかりました頑張ります!!」

(厳しい課題だけどさすがに胸を
触らすわけにはいかないし
成績が良くなるなら「石」(鳥ね))





しかし麻紀の予想は外れてしまう
好奇心旺盛で性欲が強い年代
おさむは一層の勉強に時間を費やす
麻紀のアドバイスで今までの勉強の仕方
かえたおかげもあり
見事、おさむは全科目90点以上を取り成し遂げたのだ

「先生やりましたよ！」

「凄じじゃないおさむ君！
ここまで成績が上がるなんて先生嬉しいわ」

「はい、すべて先生のお陰です
それで約束の事を覚えていますか？」

「う…ま…って体育の評価が低いわね
運動を疎かにするのはよくないと思うの」



「ぞっそんな！せっかく頑張ったのに」

「ぞっままで落ち込まなくても
やっぱり私は教師だしそれに色々年齢的に
こういうのはマズイと思うのよ」

おさむの落ち込み具合に焦る麻紀
自分の胸を触りたい為に趣味の時間も削ったのだろうと
同情してしまう

「はぁ。。。おさむ君が内緒にしてくれるのなら
約束通り触らしてあげる」

「本音だー」

「服の上からじゃならぬダメよ
それ以上の事はなし、らだわねっ」

「もっもちろんだ」

「ほっ、それじゃ触ってららわよ」

恥じらいながらも
麻紀は覚悟を決め
豊満な胸を突き出す

夢にまで見た先生のおっぱい
これを今から自由に揉みだして
良いのかと思うと胸が高まり
下半身の棒に血が沸き立つ

「さっ触りますよ先生」

「んっ……っ早くして」



初めて触る女性の胸
柔らかくてマッシュマロみたいな感触
手のひらに収まらない程サイズだ

「やっ柔らかか」

(友人の話では堅いって言うっていたけど
人によって違うのかな)

麻紀の胸は年を取り
張りがなくなり柔らかくなっている

おっ
あ

「おさむくんのきこちない手つき
まだまだ子供よね」

夫が他界してから十数年以来
男性に揉まれることはなかった
くすぐったくもあり物足りなさもある



「おさむ君、生の胸みてみたい?」

「Yes please!」

「ooooん」

周りを見渡す
二人が居る場所は
壁際だれにも見られないだろう
きついボタンを外し
白い肌が露出する
黒いブラジャーに
スイカ玉が収まっている
おさむはゴクリと
生唾を飲み込む



少し大胆な行動だが
性欲が溜まっていて
物足りなさを埋める為
生乳を曝け出してしまっ

「これが先生の生おっぱい」

生で見る乳は格別な物だった
神秘的な形に淡いピンク色の乳首

「なんて綺麗なんだ」

「おっぱいっすね」





「あ……んっんっ
はうう……っっ」

「す……いよ
先生の胸
僕の手が見えなくなってる」

「もうっ、年増の胸なんかで
喜ばないで……っ」

「先生の胸すごく綺麗ですよ
僕はこのおっぱいが
乳首が大好きです」

「あ……んっ
おさむくうん」



「先生……っ！」

「あ……っ……」

乳首を指と指で挟み
こねくり回す

ピクンッと肩が跳ねる
久しぶりの刺激で
軽く弄られても
感じやすくなってる

はぁ

「はうん……乳首っん

いい……はあん……」

（おさむ君の

おちんちん勃起してる

本当に私事を好きなのね）

おさむが執拗に乳首を弄ると
徐々に乳首が膨れ大きくなる

『先生の乳首
大きくなっていますよ』

『久しぶりだから
感じやすくなってる…』

『気持ちいいですか？』

『うんうんもっと強くしても良いよ！』



「ひゅーんっ……」

「だめっ……おさむ君ごんなっ」

「はうっ、乳首ツンツンっ……ちやうっ……」

静けさが漂う塾の部屋で
乳房を吸う音が少しながら
漏れ始める

「だめっ……声ではれちやうっ……」

「おっおさむ君っ……」

ちゅぽ

ちゅぽ

徐々に声が漏れ始めてきた事に
彼女が我慢しきれなくなったのを
おさむは察する



「先生好きなんです
ね 虐められるの
ちゅぶちゅぶらら」

「そんなっ・好きじゃないわっ
あんんっ・ただ久しぶりなだけで
あんっ♡」

「我慢しないで先生
僕はスケベな先生も愛せますから」

「だっだめっ・乳首吸いながら
告白はだめよっっ・はううんっ♡」

ちゅぶ

セパっ
ちゅぶ



回いっばいに広がるデカ乳首
出るはずもない母乳を求め
じゅるりと吸い始める

「だっだめっ
触るだけって……
そんなに強く吸われたら
んあっ♡」

「すっごいっ……はあ、
んっ、ちゅぶちゅぶ
先生の乳首大きくて
美味しいよっっ」

ちゅるる



おさむの涎で
濡れ光る乳首

「なんて美味しいそうなんだ
こんな果実はこの世にないよ…」



M気質な麻紀を感じさせるため
乳首に甘噛みする





「んんんんん!!!」

んんん

んんん

今までにない強い刺激に
体が跳ね軽く絶頂した

「神田さん?どうかしたかい?」

同僚の先生が先ほどの声を聞き
声をかけてきた

「だっ大丈夫です
少し飲み物が付いただけです」

「そうですね
お静かにお願いしますね」

「申し訳ございませんでした」





「ふう……おさむ君のせいで怒られちゃったじゃない」

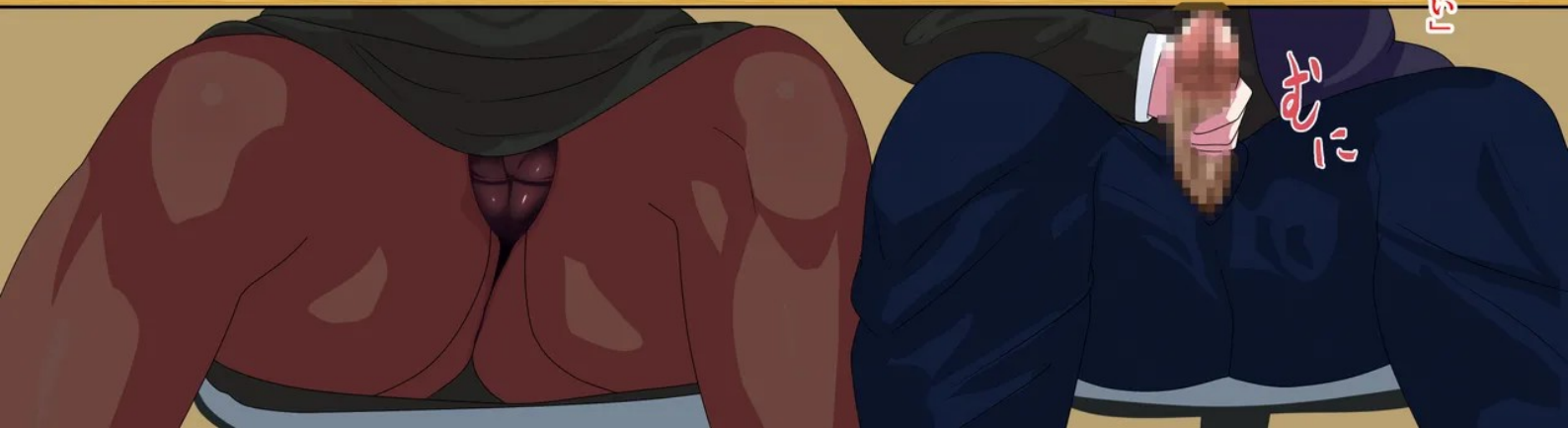
「すみません先生がいやらしくって…」

「仕方がない子ね、次は私がお返しをしてあげる」

「先生!？」

おもむるにおさむの股間に
手を入れまざる

「しっ、しっずかに
こんなに大きくしてたら
勉強に集中できないでしょ」



おむに



「うああっ……っ！」
(先生の手で触れるだけで射精しそうにっ)

「おさむ君のペニス大きいのね
先生ドキドキしちゃう♡」

久しぶりに握った
若くて堅いペニス
熱が手にまで伝わる
手慣れた手つきで
おさむのペニスを上下に動かす



するとおさむの体はびクッと腰が引き
気持ち様ごらんに回を半開きとなる

「はううっ」

「んふ♥気持ちさらさらの〜」

「はいっ先生の手が優しくて
僕のおちんちんが幸せになっちゃうっ」

「おちんちん喜んでくれて
嬉し〜♥」

「このぼろ
びゅっびゅっしましうね」

おさむは他人に手ロキされることも
女性触れられるのも初めて
すぐさま絶頂に達するのは当然だった





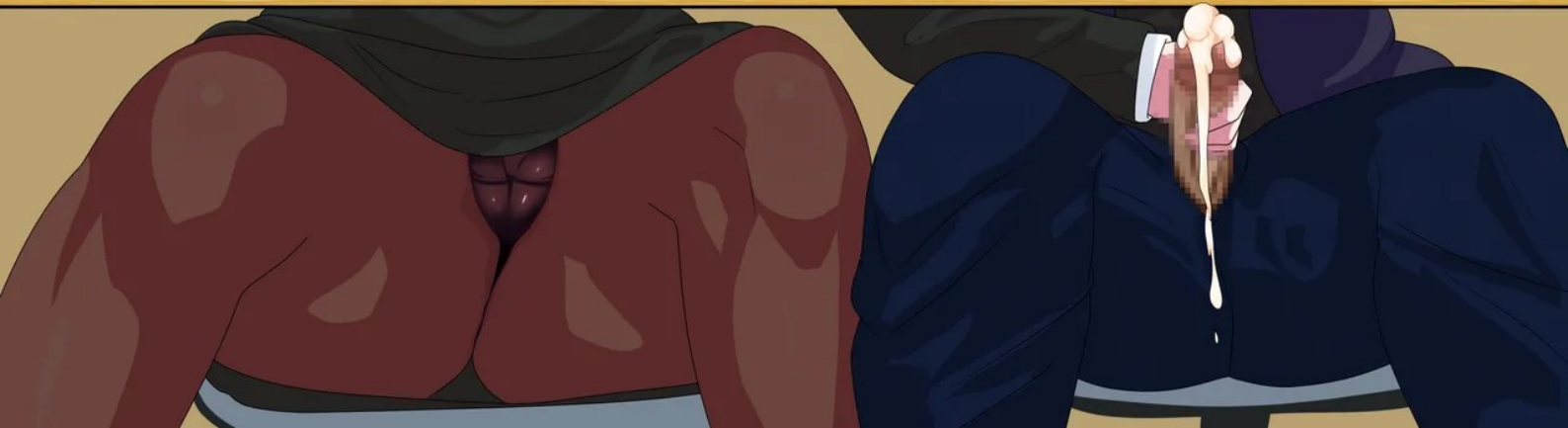
久しぶりの熱くこっぴどりとして青臭い精子にうっとりとする麻紀



「凄い……
私の手がそんなに気持ちよかった？」

「はう……
きつ気持ちよかったです」

精子を出しても勃起したまままだ若いので何回でも精子を出す事ができるのだから麻紀はおさむとのセックスを想像してしまおうと密かに股を濡らしていたことに気づく



「おさむくん汚れちゃったし
トイレ行きましょうか」

「はっはっ」

(ダメよ・・・あの子は教え子じゃない
息子よりも年下なのにセックスを想像するなんて
ふしだらな)



トイレを出た後はいつも通り
塾が作ったテキストを解き始める

「うん、満点」

「おさむ君、真面目にやっってるようね」

「どうしたんですか突然」

「少し心配だったのよ、約束が終わったから
怠けてしまう可能性もあるんじゃないかなって」

「そんな、俺は先生を裏切るようなことはしませんよ」

「それを聞いて安心したわ」

「先生に聞きたいことあるんですけど」

「なに？」



「指輪をしてないようですけど結婚してるんですよね?」

「旦那は他界して今は息子と一緒にくらしてるの」

「すっすみません失礼な事を」

「いいのよ全然、息子が居るだけでも幸せよ」

「その息子さんの年齢はいくつなんですか?」

「今は大学生、もう就活をはじめてるの」

「俺より年上だったんですね...」

「その...息子より年下でも恋愛対象になりますか?」



「えっ!?なにを…恋愛ものにも
先生なのだからいけないわ
それだけは…」

「そうですね…」

「でも先生とエッチな関係にはなりたくないな」

「それって」

「はい、今回と同じ約束をしたいです」

「だっだめだめ、そんなのよくないわ思春期だから
興味を持つのはわかるけど」

「おさむ君はもっと女性経験を身に着けた方が良いわよ」

「はい、だから先生で経験を積み重ねたいんです
次は先生のおまんこがみたいです」

「いっいやよ!そんな…」

「それじゃ俺は帰ります!勉強頑張ります!」

「おさむ君!」



(なんてこと・・・おさむ君「本気で私を抱きたがっているんだわ
どうして若い子じゃなく私みたいな年増なんかには・・・嬉しいけど
だめだめ！何期待しているの私ったら・・・でも体は正直」
(わたしのおマンコが若い子のペニスで疼いちゃっている)



おさむは宣言通り
今回も平均90点以上を取ったのだ

「先生！やりましたよ」

「うっうん…よく頑張ったわね」

「覚えてますか約束の事…今回も良いですよ？」

「おさむ君、私みたいなおばさんより若い子の方が良いわよ」

「俺は先生じゃないとダメなんです」

「違うの、私が良いたいのは…その…
若い子の方が綺麗だし私のは少しグロテスクで
シヨック受けると思うの…」

「俺は先生の全てを見たい」

「おさむ君…♡」



おさむの凝然たる姿勢に
麻紀は受け入れざるを得ず
ありのままの自分を見せることとした

麻紀は足を広げ股間をさらけだす
下着の色は花柄のピンク色
おさむが好きそうな色の下着を
着けてきたのだ

「先生、可愛い下着はいてるんですね」



「にっ似合わなかった？」

「すごく素敵ですよ先生に合ってます
もっとまじかで見たいです」



「あまり見られると恥ずかしいわ」

「お願いです先生
足を広げて見せてください」

「もぉ……おばさんの下着なんて
汚いだけなのに……」

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ



麻紀は恥ずかしながらも
布一枚で花びらを隠してる
無防備な姿を
大胆にも生徒に対してさらけ出した

「先生・すごいです」

おさむの視線に疼く子宮
十数年ぶりに
男性に求められる事に
素直に喜んでしまふ素直な体

「だめね・わたしって・・・」

パカ
カ

身を乗り出し麻紀の太ももの間に顔をずめる

「ちよつと、おさむ君だめよ」

端っこなのでバレる事はないがこの大胆な行為には驚きを隠せない好奇心旺盛な年頃だから周りが見えなくなるのだから

「先生の香りがする」

香水とほのか漂うアンモニア臭少しシミが付いている

(先生も興奮しているんだ)

「おさむ君、女性器みたいのならパンツのヒモを解いて」

「パンツのヒモ？」



おさむは横についでいる紐を解くと
濃いアンダーヘアに生い茂る陰毛の中に
ピンク色のアワビが見える

「これが・・・おまんこ?」

「少しグロテスクでしょ?」

「そんな事ならですよ・・・
とても美味しそうです」

「おろそかい」



「んあっ！」

割れ目に指を入れると
ヌメヌメと濡れ光
中は暖かく複雑な肉壁が絡みつき
ぜん動している



「これが女性の最も素敵で大切な部位
まるで別の生き物よう」

「くっ、おさむくんっ待って見るだけって」

「ああっ！」

んあっ

「くっくっくっくっくっくっ
バレちゃうから止めてっ
おまんこが馬鹿になっちゃうからっ」



麻紀の渴望も空しく
おさむは好いた女性が体をくねらせ
びくびくと痙攣しては切なげに
嬌声をあげてる姿に心奪われてしまい
絶頂するまで止めないつもりだ

くっくっ



「はっくうううんっ!!」

く

ひん

あゝあゝ

ア

上半身を大きく波打たせ
潮噴きする
おしっことは違う匂いが無い透明な
分泌液がおさむの手と床を濡らす

「先生これって……」

「はうっ……だからやめて……
いったのに」

涙ぐむ麻紀の目をさっさとハンカチで拭き取る

「終わった後に優しくするなんてずるいわよ」

「そんなつもりじゃ、ただ先生を悲しませたくなくて」

「それより、後片付けしましょう……勉強にならないわよ」

「どう……ですね」

行為を終えた二人で後始末をすることになった



それからと言うもの
二人の仲は縮まりテストがない日でも
愛撫し合う仲にまで発展してしまう

大事な秘部を擦り合い
棒を舐めたり
花をなめ合ったり
互いの体に知らない所はないと言っほど
確かめ合ったのだ



「先生、良かったら食事に行きませんか」

「あら食事の誘いだなんてファミレスに行く？」

「いえ、個室がある所に行きましょう
予約もしてるので」

「そんな気が早い」

「お金のことは心配しないで支払い済みですから」

（可愛い子、断られない様に予約入れたのね
まだ子供だと思っただけ成長してる）



「素敵なお店ね
どうも見つけてきたの!」

「ネットで予約できるところを見つけてから
近くの店を場当たり的に、そんな感じてここになって」

「ふふ、大人の雰囲気ね」

「先生ビール飲みますか?」

「生徒の前では飲めないわよ」

「年が離れていても話題は絶えず
会話が弾む
性格の相性も良い」

「あっ先生のおっぱい
テーブルに乗っかてる
おいしそう」

「これはオカズじゃありませんよ
おさむ君」



「食べさせてもらおうかな」

「あんっちよっ」と

下側から手のひらで持ち上げ
乳を揉むとやわらかさで、指先が沈み見えなくなる

「このくらいなめらかな所で」

あ、

「大丈夫ですよ、会計するだけですし店員は来ませんから」

「もしかして、エッチなことするから個室にしたのね」

「そのままですよ」

むに

ムニョ



親指と人差し指で桜色の乳首を挟み
上下にさすったり軽くつねりコロコロと
乳首を転がす

ひく



めく

ひひひひ

「んあっ、やんっう、気持ちさらさら」

くひひ



つんと尖った乳首が「層膨らみ
ツンツン」と脈動してゐる

「やだ...わたし...
こんな店の中でおっぱい乳出で
乳首もたっちやっつてゐる」

ん、

はぁ
はぁ

「先生も興奮してるの?」

「馬鹿なこと言わなげ...
店の中でエッチなことをするなんて
イケない子」

ひく

ひく



「僕は先生にだけエッチになるんです」

「店の人に見られたらまずいわ
もう出ましよう」

「そのスリルが良いじゃないですか
楽しみましょう先生」



涎がでるほど美味しそうな
果実を口に含む

「ひゃうっ、舐めてっおさむ君」

体をくねらせ、かすれた声で
感じてる事を伝える麻紀
ぶっくりと突起した豆には舐めず
舌で田を描くように濡らして

「やあっ…」

Vova

切なく悶え訴える麻紀をよそ目に
マゾ気質な麻紀を焦らし性的快感を
高めていく

「ほあっ…」

Mo~ん

Mo~ん

U~ん



焦りした乳首は痛々しく反り起ち
紅色に熟す
ちろちろと舌で転がし、舌先で小刻みに舐める

「ほくっ……しびれちゃっっっ」

刺激が弱く満足してな様だ
次は乳首を吸い上げ
むしゃぶりつく

VaVa

わく

わん
わん

ん
ん



熟した果実の突起物を噛むと
防波堤が決壊し麻紀の全身が
快楽の波にのみこまれる

「ひゃああうらんん！」

ちゅぽ
ちゅぽ

ひゅん

ひゅん
ん





人差し指と中指でグレンパスの陰裂をなぞり
膣口に挿入する

「先生のおそろい、もうスルヌルですね
ほら、すると指が入ってくちゅきゅきゅ」

「ふぁあっんっっ……なめっっ……」

恥骨の裏側にあるざらりとしたGスポットを
二本の指でなぞる

「んっ……んっ……」

びくっとして体を痙攣させ先生の弱点を
見つけ出す



「先生こが気持ちさらんすか」

「うんっ気持ちさらんっ...♡
おさむ君も気持ちよへんならんすか」

器用にも足指でツッパをおろして
熱した棒が露出する

「うんっ、もうこんなにかチガチにして」

「うあっ
先生器用ですね」

彫刻のような綺麗な足裏で
赤黒く膨れ上がった亀頭が挟まれ
しごかれる

くちゅ

くちゅ

くちゅ



上体を反らし互いの股間から体液を放出する
精液は足の膝にまで付着し
個室の座布団は潮吹きで変色してしまっ

「ぐんぐんぐんぐん」
「ぐおおお」

いんぐうぐう

ぐんぐんぐん

ぐんぐん



「はぁはぁ…汚しちゃった…」

「汚しちゃりましたね…クリーニング代も
払わなるとね」

「もぉ…激しすぎるわ」

「先生だっぞ…」

「あははは」

おさむは麻紀の手を握り
二人で店を出る

「おさむ君、どうしたの？ 駅とは逆方向よ」

周りからは親子と思われてるに違ふなぞと
麻紀は悲しげな表情をする
おさむは何も発せずただ手を握りどこかへと
導くとしていた
先ほどと打って変わって強張った顔のおさむ

「先生、一緒に行きたげ場所あるんだけどさっ」

「Fuuuun...」

ただ道びかられるまま二人は風俗街の所に
麻紀も察する

「この子、今日私を抱くつもりだ...」



実の子よりも年下の男性に手を引っ張られる
本来なら年上の麻紀がリードしてあげるべきなのだろう
だが抱かれると思うと体が硬直し思考が追いつけなくなり
言葉も発せずうつむくだけ
まるで処女のような行動をとってしまっ
無言のままビタリとおさむは立ち止まる
そこはラブホテルの入り口だ

「入るっか……」

「……」

おさむは小さく肩を手につかみ
麻紀を誘導する
カギを渡され部屋の中で





深い沈黙、見つめ合う視線
三人は互いに確かめ合うように
衣服を脱がし始める



仰向けにベットで寝る麻紀
その裸体は他者から見たら
脂肪がつきぶよぶよ腹に垂れ下がるおっぱい
黒く生い茂った剛毛な森
それは美しくない素乱な体かもしれない

だが、おさむは違った
どの様な彫刻作品にもない
美しい脂肪の円を現したお腹
脂肪が垂れ下がり手の甲が見えるなく
程にまで柔らかくなったおっぱい
大きく膨らんだ乳首はイチゴの様だ
そして熟し使い込んだとろとろのマンコ
どれもが心惹かれ魅了されてしまう
熟女こそが美の最高峰なのだ

「先生…入れるよ」

ガチガチに反り起った勃起ペニスを麻紀に見せつけコンドームを付ける

黒い茂みをかき分け赤く縦割れた陰唇を上下に擦り粘膜が付着させ中にいれようとした

「まって…おさむ君…」

「先生？」

「この一線を越えたら男と女の関係になるのよその覚悟はできてるの？」

「……」

（私は卑怯な女だ、ここまで来て引き返せる男は居ない
これからの事を彼には覚悟して欲しいし私も彼の事を愛してしまっているから逃したくないから……）



「僕は変わりませんよ・・・あなたを愛し続けますから」

「おさむ君・・・」



「んあっ!!」

ぬふっ

麻紀の中にペニスを突き入れる
しっかり入ってるのか接合部を見る
中は暖かくペニスを離さんばかりに
締め付け肉壁が蠢いていた

あ



「あっあああ……」

おさむの想像していた以上に麻紀のまんこは
気持ちよく刺激的だった
下半身を少しでも動いたら射精するだろう
けれど先生の前であれだけ格好つけた分
情けない姿を見せるわけにはいかず

「先生……うっ……うっ……ぎます……」

「おさむ……おさむ君……」



「うっ……ああっ……!!」

「えっ!!」

動こうとした瞬間
強烈な刺激と共にペニスが跳ね射精してしまう

「あ……」

(おさむ君、私の中で射精してる
おちんちんが跳ねてるのが感じ取れるわ)

ひゅっ

ひゅっ

ひゅっ



「すみません・・・でちゃいました」

「謝らないで、またの機会で」

「だって大丈夫です！まだ起つてますから」

「あらやだ、若いのね」

割れ目からペニスを抜き取ると
コンドームには射精した証拠の
精液がぶつくりと膨らんでいた

「だから先生！やりましょう」

「キャッ！」

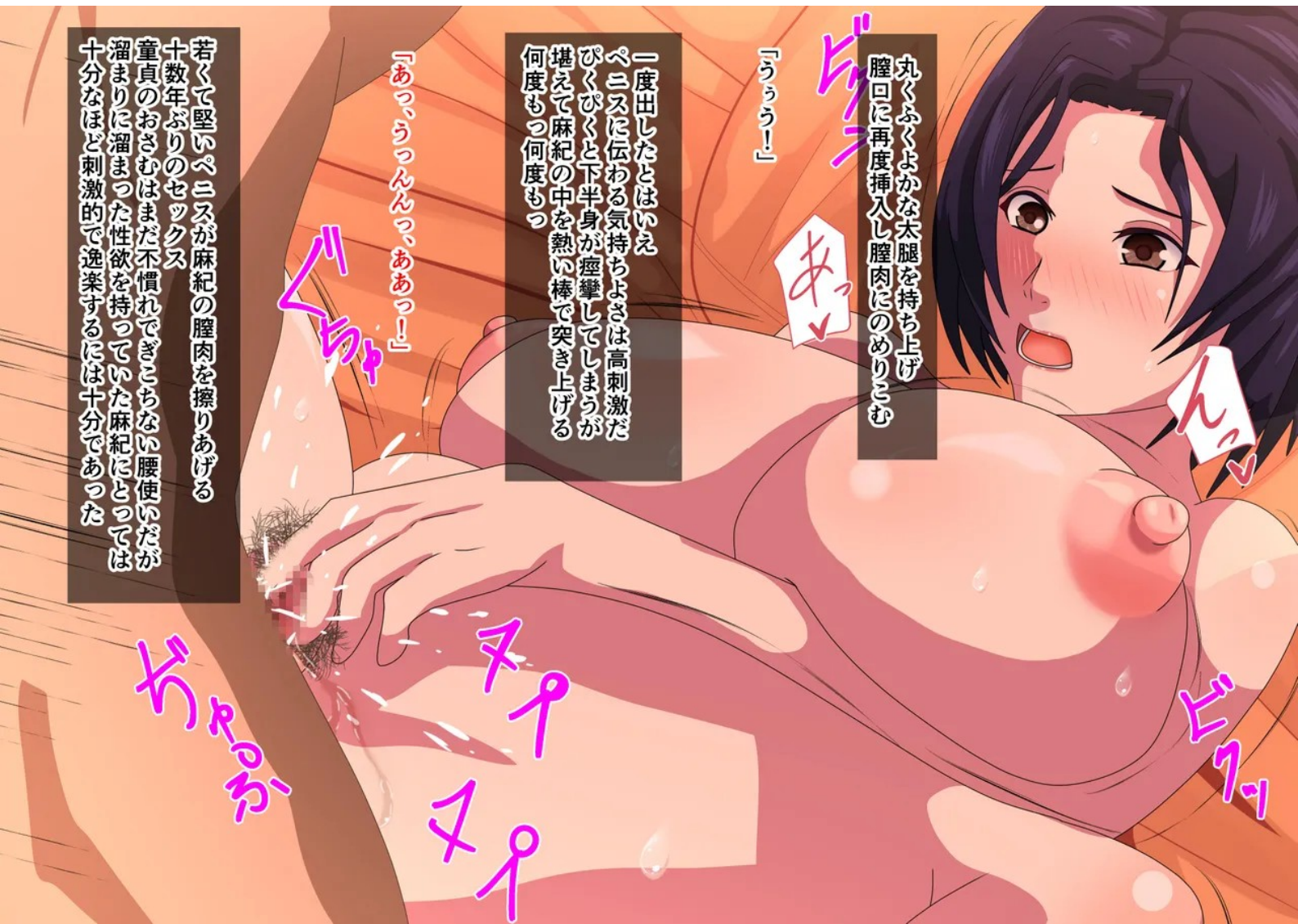
丸くふくよかな太腿を持ち上げ
膣口に再度挿入し膣肉にのめりこむ

「うううー！」

一度出したとはいえ
ペニスに伝わる気持ちよさは高刺激だ
びくびくと下半身が痙攣してしまうが
堪えて麻紀の中を熱い棒で突き上げる
何度もっ何度もっ

「あっ、うっんんっ、ああっ！」

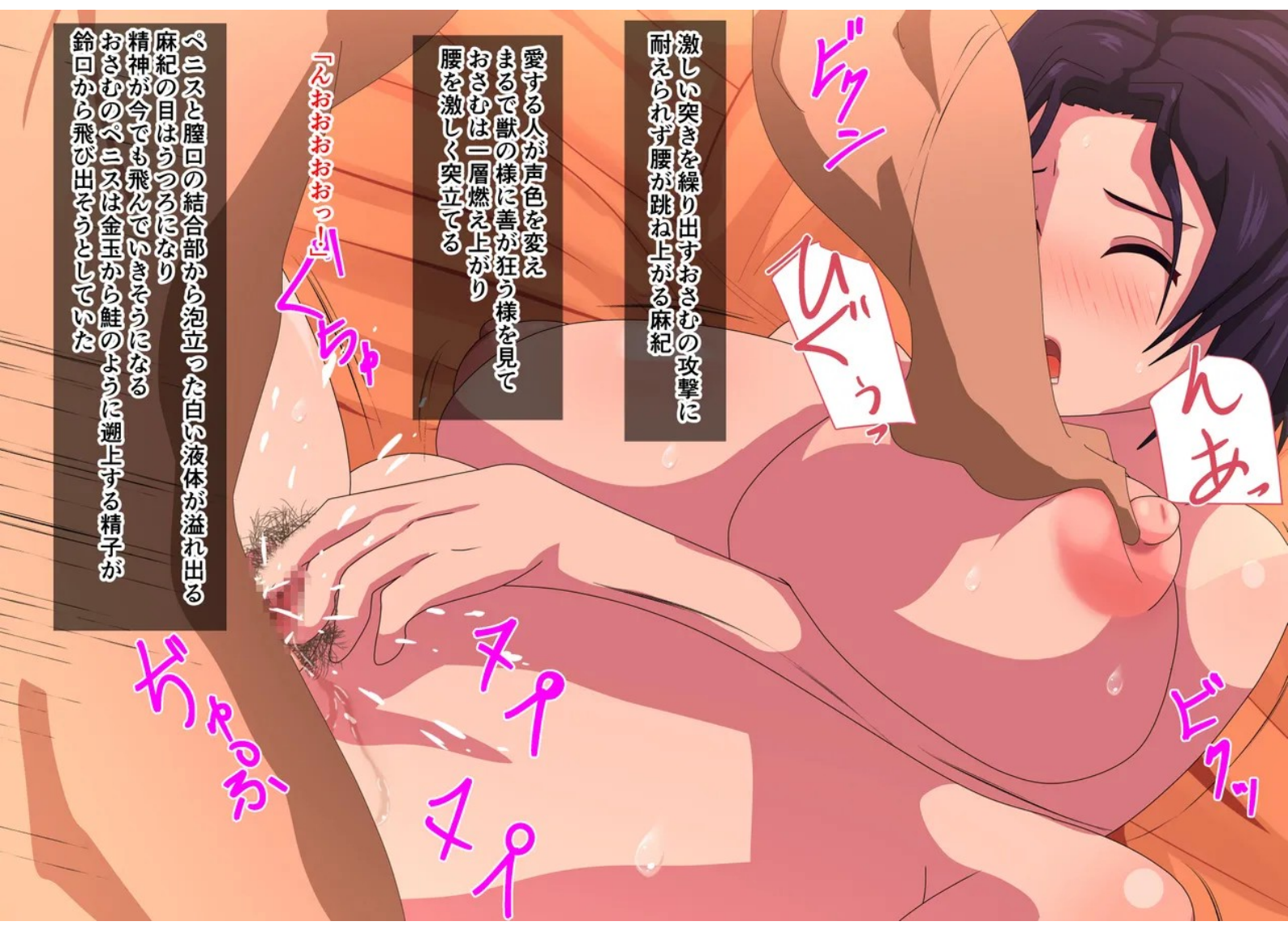
若くて堅いペニスが麻紀の膣肉を擦りあげる
十数年ぶりのセックス
童貞のおさむはまだ不慣れできこちない腰使いたが
溜まりに溜まった性欲を持っていた麻紀にとっては
十分なほど刺激的で逸楽するには十分であった



激しい突きを繰り返すおさむの攻撃に耐えられず腰が跳ね上がる麻紀

愛する人が声色を変えまるで獣の様に善が狂う様を見ておさむは二層燃え上がり腰を激しく突立てる

ペニスと膣口の結合部から泡立った白い液体が溢れ出る麻紀の目はうつろになり精神が今でも飛んでいきそうになるおさむのペニスは金玉から鮭のように遡上する精子が鈴回から飛び出そうとしていた



麻紀は絶頂し全身ががくがくと痙攣し失禁までしてしまう
おさむのペニスを淫肉がビクンビクンと痙攣し収縮する
おまんこの絞めつけに痛みさえ感じる

「うっ…あうっ…」

「んはあっ、はあはあっ…
おさむくんのおちんぼ気持ちよかったわ♥」

「良かった、僕のペニスで気持ちよくなってくれて」



「先生、もう一度セックスしてください」

快感の余韻と脱力感
久しぶりの悦びに麻紀はぐったりとする
対照的に
おさむのペニスは萎えることなく
再び硬直化している

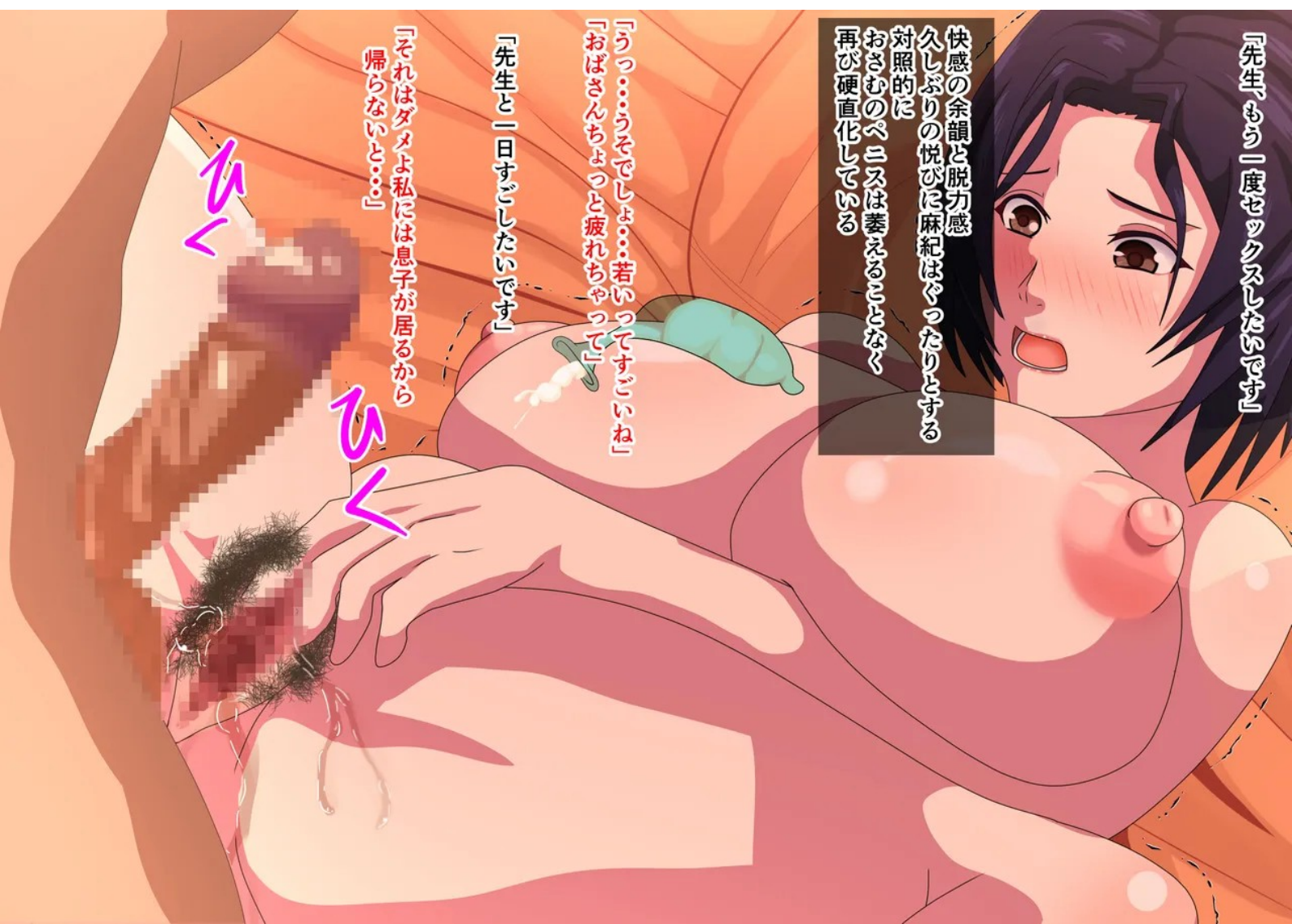
「うっ…うそでしょ…若いつてすごいね」
「おばさんちよつと疲れちゃって」

「先生と一日すごしたいです」

「それはダメよ私には息子が居るから
帰らないと…」

ひく

ひく



部屋から電話のコールが鳴る
ホテルから電話などではなく
ソファアールから聞こえてくる

「私の携帯の音だわ」

「誰からですか？」


「やだ息子から」

大変！もうこんな時間だったのね」

「もしもし、ごめんね今

同僚と飲み会に誘われちゃって」





息子を優先にされ少しばかり嫉妬してしまうおさむブリッとした桃の型の尻を突き出され思わずおさむは生唾を飲み込む
まるで妊娠させて欲しいくて挑発してみたいだ

(息子さんとの話で夢中で気にしてない様だ先生に生チンポ挿して妊娠させたい)

まるでカマキリの交尾みたく恐る恐る近づき生ペニスを壺に狙いを定める息子に夢中になつてはまた気付いていない

生で初めて感じる生マンコの感触
膣温三十八度位の温もり
まん汁それに膣肉がペニス絡み
カチを刺激する
どれもコンドームでは感じ取れることが
出来ない感触ばかり

「んぐう…んんっ！」

「あれ？お母さん何か叩いてる？」

「えっ…うっうんっ…あっ…何も叩いてないっ！」
同僚が何か叩いてるんっ！」

「そう、楽しんでるんなら良いけどさ
何時に帰ってくるの？」

「それはっ…ん、ちょっとわからないのお…」

(いめんね！)

君のお母さんは
朝帰り赤ちゃん袋に俺の精子入れて
帰ってくるからねっ！！

おさむは渾身の力で腰を突き上げ
亀頭を子宮にめがける押しつぶす
すると淫肉が収縮しペニスを本能的に吸引し
麻紀の全身に電流が
流れ絶頂を向かい入れる

パチパチニぐちゅ

ニぐちゅ

パチパチニぐちゅ

「母さん先に寝てるね、ゆっくりしてきね」

息子に性行為がバレない様に
必死にかすれた声で応答する
足はガクガクト生まれたての小鹿の様だ

「うっん...お休みっう」

抜かれた膣回からは
まん汁と精子が混ざったり
粘り気が増した精液が零れ落ちる

グ
グ
グ



「んあっ…はあはあ…
こっこんなに中に出して…
妊娠しちゃうじゃない!」

「すっすみません…
嫉妬しちゃって
中に出して先生を
自分のものにしたくなって」

「ふふ、私なんか独占欲もっちゃうの?」

「当然ですよ、好きな人なんですよ」

「ふふ、そうよね
でもこれだけ出したのなら
もう勃起しないわよね」



ふとおさむの下半身を見ると
最初と変わらず勃起したままだった

「うっすぞうしょ」

「先生、今日は朝まで帰させませんから」

「やっやだっ」

「あん」



「はぁ……本当に朝までやると思わなかった」

「すっ……すみませんセックス初めてだったから」

「ふふふ、本当に若いって良いわね」

「十年分のセックスが二日で来たみたい」

「これからも先生とこうしてセックスしたいです
いいですか」

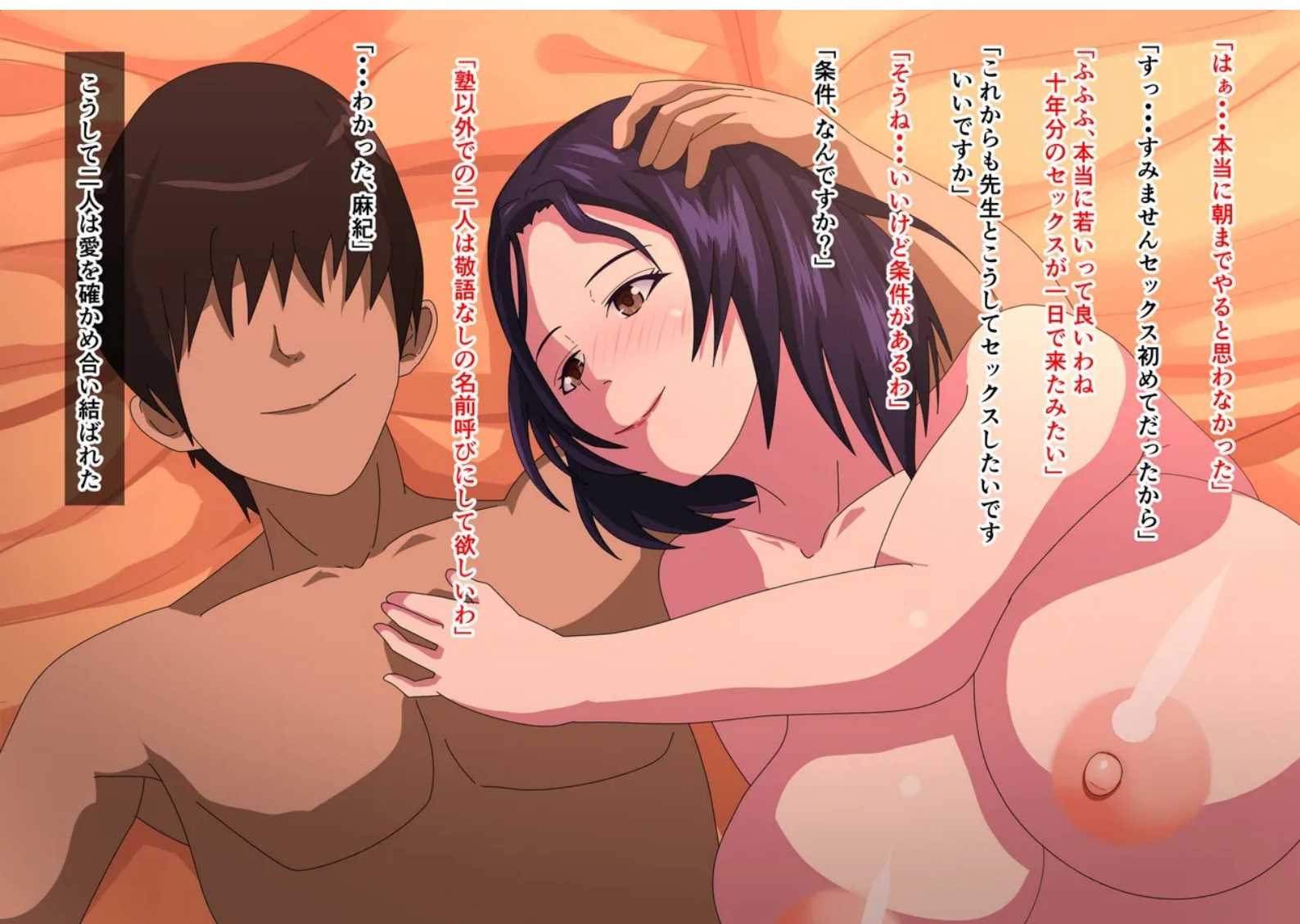
「そうね……いいけど条件があるわ」


「条件、なんですか？」

「塾以外での二人は敬語なしの名前呼びにして欲しいわ」

「……わかった、麻紀」

こうして二人は愛を確かめ合い結ばれた





時が過ぎ
おさむが大学受験に合格し
麻紀と結婚する事になった



麻紀のお腹は新しい命が宿り
相も変わらずセックスし続けている

「あああつんーそんなにチンポキスされたら
赤ちゃんがびっくりにしちゃっう！」

「麻紀のミルク美味しいぞ！」

「だめっ赤ちゃんの分がなくなっちゃう」

「なら俺のミルクを飲ませてやるよ！」

「ああつん！だしてええ！」





「んっ……あなた愛してるわ」❤️

「愛してるよ麻紀」

二人の幸せはいつまでも続くだろう

— 終 —











































